

(要約版)

## 近世オスマン帝国都市におけるタバコの流通と消費文化 —エジプト諸都市とイスタンブルの比較研究—

助成研究者 長谷部史彦 (慶應義塾大学文学部教授 アラブ史)

共同研究者 藤木健二 (慶應義塾大学文学部助教 トルコ史)

### 1. 目的

オスマン帝国では、16世紀末にタバコの喫煙の普及が始まり、この新来嗜好品の流行は、都市を中心として帝国の社会・経済、支配層や住民の生活文化に多大な影響を与えていった。しかし、その史的的重要性にもかかわらず、近世オスマン帝国におけるタバコと喫煙をめぐる研究は、世界的にみても今世紀に入り漸くその端緒についての初動段階にあり、本邦では中東諸言語の史料を用いた学術的考察は皆無に等しい状況にある。本研究の目的は、このような空白を少しでも埋めることにある。具体的には、17-18世紀のオスマン帝国諸都市の中で特にエジプト州の州都カイロをはじめとしたエジプト諸都市と帝国の首都イスタンブルに考察対象を絞り、中東諸言語と欧語の関連史料の調査と分析を基盤として、タバコの流通・消費と商人の実態、タバコや喫煙具をめぐる生活文化や風俗習慣、政治権力のタバコへの態度、喫煙の是非をめぐるウラマー（ムスリムの学者たち）の論争と社会的葛藤といった歴史研究にとっての重要課題について、上記都市間の比較検討も念頭に置きながら多角的な解明を試みようとするものである。

### 2. 方法

歴史学研究の手法による本研究は、上記の目的のため、先行研究の成果を集めて総合化を図りつつ、17・18世紀とその前後に記されたアラビア語、オスマン・トルコ語、欧語の叙述史料と文書史料の調査・収集・分析を行ない、総合的検討を加える。エジプトの関連史料については、カイロの国立公文書館所蔵のイスラーム法廷台帳史料のうち、カイロ大法廷（バーブ法廷）の台帳とナイル・デルタの都市マハッラ・クブラー大法廷の台帳の調査・閲覧を行ない、同地のアラブ連盟写本研究所で叙述史料を調査する。イスタンブルに関しては、トルコ宗教財団イスラーム研究センター付属図書館に所蔵された計4種類のイスラーム法廷台帳（イスタンブル法廷、イスタンブル・バーブ法廷、2つの遺産管理法廷）を利用して内容の検討を行なう。同地では総理府オスマン古文書館所蔵の行政文書の調査・分析も進める。また、日本の諸機関に加え、パリの国立図書館、アラブ世界研究所図書館、東洋諸語図書館で欧語文献を中心に調査し、研究する。

### 3. 結果と考察

当該テーマについては世界的に研究が始まったばかりであり、課題は山積している。現

状は断片的な史料記述から基本的な事実を収集する段階にあると言わざるを得ないが、今回の調査・研究に基づき、カイロなどのエジプト都市とイスタンブルについて比較の視座から検討した結果、以下の諸点を指摘することができる。

- (1) 17世紀前半のタバコ禁止令について、従来の研究ではムラト4世期に代表されるイスタンブルの事例のみが注目されていたが、今回の研究によってエジプトでも州総督による弾圧の事実が確認されたことから、大状況としてはイスタンブルとエジプト都市に差異はなかったといえる。禁止令や弾圧が頻繁に行われた17世紀前半には学者の間で禁止(ハラーム)論が優勢であった点、そしてシェイヒュルイスラームがタバコを許容(ムバーフ)とする法勸告を出した後に政府がタバコを事実上容認していった点は注目に値する。政策決定に対して学者の見解が持つ影響力の大きさを示すものである。また、学者たちは帝国内で地域を超えた結び付きを構築していたため、タバコをめぐる法学的議論も基本的に共有されていた。法学論争は当該期を通じ継続しており、禁止論者や嫌煙論者の学者たちとその影響下の民衆の存在は、社会的緊張の一因であったと考えられる。
- (2) カイロでは1699年の紛争のように、喫煙をめぐる激しい騒動も生じたが、同様の事態はイスタンブルの社会史にはみとめられない。マグリブから大量のメッカ巡礼者と移民を受け入れていた巡礼拠点都市カイロの特殊な事情を考慮する必要があるだろう。
- (3) 葉タバコの生産・流通について指摘すべきは、代表的なタバコ消費地であったエジプト諸都市とイスタンブルとその周辺部では、ともに需要を満たすに十分な葉タバコ栽培は行われず、他地域からの輸入に依存していた点である。イスタンブルでは多くをバルカン(ギリシア、マケドニア、ブルガリア)産に頼り、それらはエーゲ海沿岸のカヴァラ・イエニセア・テキルダー経由で主に海路で運ばれた。エジプト諸都市へはバルカン産とシリア産の葉タバコがそれぞれテッサロニキ(とエネズ)、ラタキヤを経由して運ばれた。イスタンブルへの供給の特徴としては、タバコの伝播以前からイスタンブルへの重要な食糧・物資の積出港であったテキルダーがタバコ流通でも重要な役割を担ったこと、イスタンブルがバルカンからアナトリア北部へと供給するルートの経由地でもあったことが挙げられる。水ギセル用タバコは、イスタンブル・エジプト諸都市ともにイランからバグダード、シリア諸都市を経由して供給された。
- (4) タバコの卸売商については、エジプト都市では商館を拠点としたシリア系、トルコ系(バルカン半島系を含む)の活躍が目立っていた。イスタンブルについては今後の史料調査が必要であるが、シリア系(チャーミー)商人の活動はこれまでに確認されていない。カイロについては、テッサロニキの場合と同様にズィンミー(イスラーム国家の非保護民)であるキリスト教徒やユダヤ教徒のタバコ商人たちの活動が確認された。
- (5) タバコの小売店については、イスタンブルでは海路のルートの終着点である金閣湾とその周辺への集中傾向がみられ、これに対してカイロでは、河港ブーラークの実態解明が課題とはいえ、市内の中心部への集中傾向が顕著であった。また、カイロにおいて

タバコ小売組合や嗅ぎタバコ組合といったタバコ関連業種の同職組合の存在が幾つか確認された。イスタンブルについては法廷記録の調査・分析から小売商の在庫や備品に関する具体的情報が得られた。小売商の実態を解明する上で重要な手掛かりとなり得ることから、今後同種の史料をカイロについても可能な限り探査する必要がある。

(6) 喫煙方法はいずれの都市でもキセルが中心であったが、インド・イラン起源の水ギセルの使用も一部みられた。少なくとも 18 世紀の段階では、いずれの都市でもヨーロッパ人が特筆したようにキセルを使用しての喫煙は極めて盛んであり、少なくとも市内を移動する成人男性にとって、キセルは日常的な携帯品となっていた。また、18 世紀のイスタンブルでは喫煙マナーが議論の対象となったが、エジプト諸都市についてはそうした問題は管見の限り顕在化していない。